アエネーアースの家庭内における「孤独」の意味（上）

永　田　康　昭

1.　『アエネーイス』（以下 *Aeneis*）の主人公アエネーアース（以下 Aen.）の孤独或は孤立という問題に関しては、これ迄もしばしば取り上げられ論じられて来ている。

例えば作品中の登場人物間の対話という点について見ると、ホメーロス（以下 Hom.）においては、ある一人の人物が話せば他がそれに答え、また更に他がその後を引き継ぐというように、対話にその内容が一つの結着を見るまでの自然な連鎖があり、物語はそれに乗って筋が展開するという例も多い。それに対して、ウェルギリウス（以下 Verg.）の *Aeneis* においては、そのような会話の自然の応酬或は流れが、そのままその場で描かれるということは寧ろ稀なことであって、例えば一方が話せば何らかの形でそれに対する他の応答は省かれているというような事例が目立つ[1]。

このことは、登場人物相互の関係の疎遠希薄という印象を読者に与える一つの誘因となっている訳であるが、のみならず、*Aeneis* においては、人物間、中でも当然そのようなことが期待されてよいと思われる家族の間においてでさえ、対話を含めた寛いだ親和の場面の描写が目立って少い。これは Aen. とディードー（以下 Dido）との関係についても同様であって、彼は単に彼女と別れなければならないばかりではない。二人の少くとも暫くの間は継続し得た関係の明るいポジティヴな側面については、作者は殆ど全く口をつぐんでいると言ってよい。

そしてそのように人物相互間の親密、親和、信頼等の関係の描写に代って *Aeneis* で特に強く我々の印象に残るのは、とりわけその主人公 Aen. の孤立、ただ一人彼が苦しみ、迷い、耐えているその孤独の姿の方なのである。

2.　この Aen. の孤独をどう見るかについては、これ迄も様々の解釈がなさ

れて来ている訳であるが、それらはおおよそ、それは作者の用いた技法、作品全体に亘る叙述法の特質に由来するという見方と、またそれは Aen. 自身の役柄、その作品世界の中で置かれた位置に関係していると見る見方と、その二種に大別できる。そして少くとも私には、そのいずれもの考え方がこの問題を見るに当っては不可欠のもののように思われる。

まず前者についてであるが、例えばその人物間の対話の僅少ということについては、勿論 Hom. には対話なら対話を、或はその流れを出来るだけそのままの形で、言わばその全体性を保持させながら再現して聞かせようとする傾向が強いのであるが、一方、叙述の緊迫、集中ということを求める Verg. は、人物の対話についても、それをその機能の面において把え、省けるものは省けるだけ省くという処理の仕方をしている、という分析がある[2)]。この見方は恐らく人物間の親和の場面等についても適用できるのであって、その種の描写も文字通り絶無という訳ではなく、作者の側の物語のテンポ、或は所謂パトスの高揚維持等々の理由から、ただそこでその表現が抑制されているに過ぎないと取ることも出来る訳である。

つまり *Aeneis* における人物間の疎遠、Aen. の孤独、またはその印象は、そのような作者が何かそれとは別の意図のもとに工夫した技術的な操作、技法の言わば副産物として偶々現れて来るものなのだと、一方では考えることが出来る訳である。

この種の見方は必ずしも大方の賛同を得ていない模様であるが、少なくとも私には決して見逃してはならない重要な指摘であると考えられる。と言うのは、このような機能優先の処理操作は、*Aeneis* においては、単に対話の場面のみに限らないのであって、Verg. は Aen. を始めとする登場人物たち自身をも同じような機能的な目で、その役割だけに限定して見る傾向がある。Hom. には前後の筋にかかわりのない一見無駄と見える事柄まである人物なら人物について喋舌り込む癖があるが、その無駄は、その人物のその場における役割だけでなく、その人物の背景を、或はその全体性を聞く者に同時に意識せしめる役を果している。叙述の効率、パトスの集中等のみを追求するのあまり、その無駄を無駄として排する Verg. は、極論すれば、人物をもその役としてしか描かず、人と人との関係はそこではそのような単なる役と役との関係に局限されてしまい勝ちである[3)]。このような Verg. の機能重視の叙述法が、作品中の人間関係の希薄、また主人公 Aen. の孤独という強い印象を生み出す一大要因となっていることは否定し得ないと私には思われる。

3.　が、しかし乍らまた、そのような観点からは、問題はその半面を見たことにしかならないであろう。この問題に対する今一方の解釈の仕方は、既に触れた如く、Aen. の孤独は彼の役柄そのものから来ると見るもので、むしろこの方向において、小異はあるものの、諸家の意見は一致を見ていると言ってよい。

これは要するに、Aen. は神或は運命から使命を課され、結局それを果す訳であるが、その遂行のためには彼は周囲から孤立し、孤独に耐えねばならない、その使命そのものがそれを彼に要求するのだと考えるもので、より具体的に説明すれば、その彼の使命とは、ギリシア軍の手に落ちたトロイアの町からトロイアの守護神や家族等を救い出し、落武者たちの一行を率いて神の指し示すイタリアを目指す、そしてその地での戦争に勝ちをおさめてそれらのために新たな安住の地を得せしめるというものであった。彼は長年月の幾多の苦難を越えて最後にはその使命を達する訳であるが、そのためには、例えば彼は勿論 Dido とは別れる他はない。また時に気力を失い勝ちな同行の者たちとの間にも幾許かの距離は生じざるを得ない。

そしてそのように自らにも犠牲を強い、困難な目標へ向って集団を率いて行く彼は、周囲からは一段も二段も抜きん出た存在で、またその孤立を耐え、維持して行ける者でなければならない。が、しかし乍らその一方において、その彼も無論人間なのであるから、神々の間に交ることも出来ない。こうして彼は、天上のまた地上のいずれの世界にも属さず、その中途にただ一人位置して、孤独のうちに迷い、苦しみ、耐えて行く他はない。それがそのような使命を課された彼の宿命なのだ……というようなことに、私なりに代弁すればこちらの説はなるであろうか[4]。

4.　以上の見方は多くの研究者のほぼ一致した見解であって、確かに説得的であり、この問題の残りの半面はあらかたそれで説明されてしまっているとも言えるかもしれない。私は殆どそれに合意する者であるが、ただ細かい所でやや疑問に残る点があるので、そのことについて以下少しばかりこだわってみたいと思う。

それは Aen. の人間界での孤独の説明の仕方についてであって、彼がその役柄から天地の間に孤立しているというのは恐らくその通りであろうし、また彼が人間である以上、天上の世界に属し得ないというのもむしろ当然のこととし

て理解できる。が、彼が同じ地上の人間界においてでさえも孤立しているというのは一体何故なのか。

この見方はその Aen. の地上での孤独を、使命或は責任を帯びた統率者の孤独、様々の点で周囲から抜きん出た者の孤独という図式で理解し、そしてそれですべての片を附けてしまおうとする節があるのであるが――この場合その二項は同じ一つのものと考えられている――、私には、その図式の適用には解釈者の側にやや感傷めいた勇み足があるのではないかと思われる。そして原文には何かもっと別のことが書いてあるように思われるのである。

これはやや既述の内容と重複することになるが、例えばこの問題を扱った最近の論文に D. Feeney の 'The Taciturnity of Aeneas' と題するものがある[6]。Feeney はそこで、次のような D. J. Stewart の言葉を援用して、ほぼこの問題に対する彼の結論としている如くに受け取られる。すなわち曰く、'He (Aeneas) must pretend to enthusiasms he does not feel, repress emotions he does feel, and generally behave not as a free individual but as the incorporation of a society's needs, a trust-officer for other people's future.' また、'the Dido story is a metaphor for what any politician must be prepared to do: to sacrifice every last personal tie, if necessary, to help keep the political enterprise going.' と[7]。

この Stewart の見方は、「政治家」等の表現の適否を度外視すれば、先に私が代弁した通りの、この問題への一般的理解に沿う、一つの典型的な答え方で、これも繰り返しになるが、この問題のかなりの部分をそれは説明し得ていると言えよう。

しかし乍ら、Feeney がそれらの言葉を受けて直ちに、'The same design guides the denial to Aeneas of free interchange with all closest to him' と続けているのは[8]、これは果してどうであろうか。

Stewart も、他の諸家と同様、Aen. の地上での孤独を苛酷な使命を帯び責任を負った集団の統率者のそれとして、言わば一括して理解しようとしていることは言う迄もなく、確かにその見方は、例えば Aen. と同行の部下たちとの間の懸隔、また Dido 物語の顚末等についてはよく説明する。が、一方、Feeney の 'all closest to him' というのは、明らかに主として Aen. 自身の家族のことを指している。つまり、Feeney は、他の場合と同様の、集団を強力に統率して行こうとする者の孤独が、Aen. と Aen. 自身の家族との間の、同じ家庭内での free interchange までをも阻む 'guide' をしていると言う訳な

のであるが、これには私ははっきりと異議を唱えたい。

例えば Dido 物語の場合、Dido の願望或は要求は Aen. 一行のイタリア行きの使命とは逆行する、それを阻止しようとする性質のものである。Aen. は使命を遂行するためには Dido との関係は断たなければならない。彼は結局、最も個人的な、そして安らぎと喜びをもたらしたであろう絆を自ら断ち、Dido を捨てて使命へと赴く訳であるが、その Dido にも理解して貰えない彼がもしそこで「孤独」を味わわねばならなかったとすれば、それはその使命の故の、彼が自ら使命を果そうとするが故の「孤独」と見ることが出来る訳である。

また、度重なる苦難に意気沮喪し勝ちな部下たちの前で、自らの疑念不安を隠し、表に希望を装う時、もし彼が部下たちの前で自分一人が孤立していると感じ、統率の責がすべて自分一人にかかっていると知ったとすれば、その孤独こそ正しく統率者の孤独と言えよう。

が、それが彼自身の家族のこととなると、事情は奇妙に異って来る。我々が Dido や気力を失った部下たちのことを念頭に Aen. の「孤独」を考える時、その Aen. は、寧ろ自分が使命を推進する側、他を牽引する側に立っている。が、目を彼の家族の内部に向けると、今度はその彼の対家族の立場は、それとは逆転しているように思われるのである。彼の家族は、単に同じ使命感、同じ目標を抱いて彼と行動を共にしているのではない。逆に彼等の方が Aen. をその使命遂行へと、励まし、促し、忠告する側に、そして当の Aen. 自身は彼等に寧ろ牽引され、統率される方の側に回っていることが多いのではなかったか。

例えば、その模様の一端は Dido 物語の中にも垣間見ることが出来るのであって、Aen. は Dido との別れの遣取りの中で、自分から好んでイタリアへ向かうのでないこと（4.361）、夢に自分の父や息子が現れて自分を苦しめて来ていたこと（4.351-5）等の事情を明らかにしている。この場合、彼と彼の家族の間には明らかに距離がある。そして彼は例えば自分の方がいやがる家族の尻を叩いて出発させようとしているのではない。話は逆なのであって、彼は彼等への義務或いは責任の観念から、或いは彼等への 'pietas' から、彼等に引かれる形で、むしろ統率される側に回って使命遂行への途につくのである。それ故に、仮に例えば同じ統率者の孤独と呼ぶとしても、この場合は、その内実が奇妙に逆転していると言わなければならない。

そしてここに見られる Aen. の彼自身の使命に対する姿勢を消極的と呼ぶとするならば、そのような彼の消極性は、単にその Dido との場面においてのみ

認められるものではない。様を変え所を変えて、物語の広範囲に亘って現れる、これは既に読者周知の現象なのであって、実はこの物語の主人公であるAen. 自身が、何故それ程迄にその自らの使命の遂行に消極的な姿勢を示すのかが、この独特の英雄像理解のためには古来最大の難関とされて来た疑問であった筈なのである。

Aen. は常に積極的な統率者であった訳ではない。そのような或は理想的な力強い統率者というものになり切っていない場面の方が多く、むしろそのような場面の方にこそこの英雄の特質はよりよく現れている。そして今の一例にも見る通り、逆に彼自身が「統率」される側に回っている時にも、彼は他との間に、と言うのはつまり家族との間に幾許かの距離を置いて孤立しているのであった。彼は Dido と別れる時、単に Dido からだけでなく、彼の家族からも孤独を感じていた筈である。Stewart, Feeney に限らず、この一派の人々が、もし Aen. の地上での孤独を、そのように単に人の上に立って使命達成へと他を積極的に統率しようとする者のそれ、使命を推進しようとする者のその故にこそ味わわねばならないそれと、一概に理解し、それで片を附けようとしているとするならば、それはそれ故、やや単純に失する物の見方だと言わざるを得ない。そしてそのようなもう一方にある重要な或は肝腎な事実の方は、一時的にも失念されているとしか私としては取りようがないのである。

それは兎も角、Aen. がもし彼自身の同じ家族の内部においてでさえも、他から「孤立」し、「孤独」であったとするならば、それはそのような力強い積極的な統率者で彼があったが故の「孤独」「孤立」ではなかった筈である。彼はその点では奇妙にも殆ど常にむしろ彼の家族の後を進んでいた[9]。では、他の部面における Aen. の「孤独」についてはほぼ以上でよいとして、その彼の家族内での「孤独」については、これはどう説明すればよいのであろうか。何故彼は彼等と一体となって、或は逆にむしろその先頭に立って、彼自らの使命に積極的に取り組むということをしないのか。彼と彼の家族との間の距離は一体何を意味しているのか。このような問題が次の問題であって、本稿では以下その疑問の究明を目標に、更に筆を進めて行きたいと思う。実は、私自身はその Aen. の「孤独」及至は「孤立」という問題そのものの方には、或はそのそれぞれの言葉が持つ独特の含意の方を問題とすることには、さほどの興味は抱いていない[10]。むしろそのような、Aen. の家族内での「孤立」或は「孤独」とも呼び得る奇妙な一点を突ついていると、そのうちその向うに何か面白いからくりが見えて来るのではないかと、そちらの方に期待がある。そしてそのか

らくりは、もしそれがはっきりと見えて来るとすれば、この独特の英雄像解読の重要な鍵となる可能性が大変高いのである。

5. Aen. 一行は祖国の守護神を護持して亡ぶトロイアを出、イタリアへ向い、そこでの戦争に勝利する——単純に言えば、これが *Aeneis* という作品の、そしてその一行に課せられた使命の概要なのであるが、その使命達成への意識或は姿勢の点で、その一行の内部に、時に、積極的—消極的、統率—被統率、牽引—被牽引という一種分裂した関係の生ずることがある。主人公 Aen. はその場合、常に積極性を示す側に立っているという訳ではなく、逆に消極的に、他に統率され牽引される側に回っていることも少なくない。そしてその後者の場合において、彼を統率する側に立ち、牽引する役目を果たしているのは、常に主として彼の家族であった[11]——というのが今略説した通りの私の考え方なのであるが、しかし乍らこの Aen. の消極性に関しては、従来実に様々に議論がなされて来てい乍ら、それをその彼の彼の家族との対照的、そして恐らく補完的な分裂関係という視点から把握し検討するという試みは、少なくとも意識的系統的な形では、これ迄一度もなされたことがない。それ故私の作業は、Aen. 一家の中にはそのような一種分裂した状態が確かにあるということをまず示すことから始めなければならない訳であるが、しかし同時に、その分裂した状態が、私の言うように果してどのように対照的補完的に働いているのか、そしてその結果そこからいかなる意味が生み出されて来ているのか、そちらの事柄についても、その同じ過程で自ずと明らかになって行くのではないかと考えている。

私は先に2で、Verg. は単に対話の場面についてのみならず、登場人物に関しても、機能的に、その役に限定して見る傾向があると言ったが、その例はこの場合にも恐らくはっきりと見て取ることが出来るのであって、Verg. は Aen. 一家の各人にそれぞれ別々の役を割り振り、各人にその役から勝手にはみ出さないよう常に注意している訳であるが、その役の割り振り方は、最初からその使命云々ということに関して Aen. 対彼の家族というその対照補完の効果、機能を狙った極めて意図的な、周到な準備の上でのものであった。

ではその彼等の役割はそれぞれ具体的にいかなるものであったのかを、まず第2巻、いよいよ彼等がトロイアから脱出しようとする場面から見て行くことにしたい。私には既にここにおいて、今私が述べたような事柄一切が、典型的な形で表れているように思われる。因みに Aen. 一家とは、無論、彼の父親ア

ンキーセース（以下 Anch.)、母の女神 Venus、Aen. 本人、妻のクレウーサ（以下 Creusa)、息子のアスカニウス（以下 Asc.）の計五人を指すのであるが、以下の場面にはその五人が全員登場する。

まず、少し荒筋を復習しておくと――、

> トロイア落城の夜 Aen. の夢にヘクトル（以下 Hect.）の亡霊が現れ、祖国の守護神を守って逃げよと告げるが、Aen. 当人は一旦それとは無関係に、少数の兵と共に既にギリシア軍の手に落ちた市中に向う。そしてやがて王宮の屋根の上からプリアモス王の惨殺される模様を目撃して、その時始めて家に残して来た父親や妻子のことを思い出し、慄然とする。が、彼はそのまま直ちに館へは帰らず、何か別のことをしようとして（この部分未完成)、母神 Venus に止められる。Venus は家族の命を救うよう愉し、神々がトロイアを破壊しにかかっている有様をその目に見せ、そうして敵中を無事館まで送り届けてやる。Aen. は誰よりも父を助けたいと念じている訳であるが、その父は一緒に逃げるのを拒否する。すると Aen. は Venus を詰り、再び戦いに出て行こうとする。それを Asc. を抱いた Creusa が縋りついて止めようとする。その時その Asc. の頭部に炎の異兆が現れ、Aen. と Creusa は慌てて消そうとする。が、それを見ていた Anch. は、喜び、ユピテルに更に兆を送るよう祈る。館の上を星が走り、イダ山中に消える。Anch. は態度を一変させ、守護神にこそトロイアはあると言い、孫を守り給えと祈って逃げるのに同意する。一家は逃げ出すが、途中で Creusa が脱落。それを後にれって気付いた Aen. は、単身また市中に戻って捜し回るが、その彼の前に妻の亡霊が現れ、彼の行先は西方である、子を大事にしてくれと言って消える。Aen. は引き返し、他の難を避けて来た市民たちと共にイダ山をさして逃げ登って行く[12)]。

以上の場面についてまず第一に指摘したいことは、Aen. 一家の使命は、この場面においては、守護神を奉じ一家でまずそのトロイアから逃げるという所にある訳であるが、Aen. 自身は頻りにその逃げるのとは逆の方向の動きを見せるということ、そしてそれに対して彼の家族は旨ね皆その逃げる方向に向っているということである。

Aen. は夢で Hect. から逃げよ云々の使命を托される本人であるに拘わらず、目覚めるとそれとは逆に討死の積りで市中に向う。そしてプリアモス王の

死を目撃して一旦は自分の父や妻子のことを思い出すのであるが、つまりそれで一旦は彼は、逃げる方向へ向きかける訳なのであるが、しかしまたそこで何かその逃げるのとは別の方角の動きを見せる。そしてそれを止め、家族を救えと強く愉して実際に逃げる方向に彼を向わせるのは母の Venus である。しかし Aen. はその言葉通りに館に帰り父親の拒絶に会って逃げられなくなると、その Venus を非難し、また戦いに出て行こうとする。それを今度は妻の Creusa が止める。彼の父 Anch. は、予兆の後当初の態度を翻し、俄然逃げるのに積極的になる。つまり、彼の他の家族はすべて逃げる方角を向いていると言ってよいのに対して、Aen. 一人が（予兆で態度を一変させる以前の Anch. と共に）それとは逆方向の動きを見せるために、その逃げるのが阻まれ、遅らせられるという仕組みに話が作られている訳である。そして次手乍ら、その Aen. が一変する前の Anch. と共に示した動きとは、つまり、敵方に背後を見せずそのまま戦って討死するという趣旨のものであったということも、殊更付け加える迄もないことであるが、ここで念のため押えておきたい。

そして第二に指摘したいのは、一家のトロイア脱出には、ただそれだけではなく、神の意志にかかわる使命或は運命の意味合が付与されている訳であるが、この場面でその意味合を理解及至は感得できるのは、少くとも人間界においては、Aen. 本人ではない、父の Anch. ただ一人だということである。無論神である母の Venus は始めからそのことを承知している[13]。そして逃げる途中でこの世の者でなくなったらしい妻の Creusa も、その後その知に与り、亡霊となって Aen. に彼等の行先等その運命の断片を告げ知らせている。が、この事件の要点である Asc. の頭部に現れた炎の異兆を見てその意味を察し喜んだのは、その場では Anch. ただ一人であった。Aen. 本人も、生前の Creusa もただ驚き慌てて、二人でそれを懸命に消し止めようとするばかりだったのである (2. 685 ff.)。主人公たる Aen. 自身には、そのような超人間的知識或は展望は、何の理由からか、少くとも直接には与えられないようにどうも話が仕組まれているらしいと推測される訳である。

また第三に、彼等はイタリアへ向い、そこでの戦争に勝ち、新たな安住の地を得ようとする訳であるが、その行動が、物語の外、遙か三百年、千年先のローマの誕生と隆盛の基となるということが神によって予言されている。今仮に、その物語内の現世的な範囲内で、彼等にはそのようにイタリアへ向い戦争に勝つ「使命」があると言い、そしてその行為がやがては物語の外、遙か未来においてローマを生み出す「運命」になっていると、その二つの言葉を便宜的

に使い分けてみると、その「使命」と言うより寧ろこの場合、そのような遠い未来への展望を含んだ彼等の「運命」の言わば起点としては、或はその要となる人物としては、どうも Aen. 本人ではなく、彼の息子の Asc. の方が選ばれているのではないかと感ぜられること、そして Aen. 自身はむしろその Asc. を守る者という登場の仕方をしているのではいかということも、また一つの気に掛かる点である。頭部に炎の異兆が起るのは Asc. の方にであって、この物語の主人公 Aen. にではない。Anch. はそれを見て喜び、逃げるのに同意し、守護神にこそトロイアはあると言い、更に孫を、つまり Asc. を守り給えと神々に祈願したのであった (2. 702)。また Creusa の亡霊も、これは別の文脈においても取れるが、Aen. との別れ際に、二人の子供を大事にしてくれと言っている (2. 789)。つまり、そのような「使命」或は「運命」の意味合を帯びた彼等の行動は、今後、その Asc. を中心として、或は少くとも重要人物として、Aen. の方はそれを守る立場に回って運ばれて行くという予測が十分可能なのである。

第四に、以上と重複することであるが、Aen. 本人はここではそのような「使命」ともまた「運命」とも直接かかわりの少ない言わば別のレベルで行動するように作られているということも最後に指摘しておきたい点である。彼は夢の中で死んだ Hect. から守護神を守って逃げよという使命を托される。が、目覚めた後の彼は、その自らの使命を全く忘れたかのような行動を取る。彼は少数の兵と共に討死の積りで市中に向う。そしてその彼が実際に逃げ出すことの動機として Verg. が強調して与えているのは、彼の家族の生命を救うということであった。彼は王宮の尾根から王の死を見て家族のことを思い出し、少くとも一旦は慄然とする。そして彼がまた別のことをしようとしてそれを止めた Venus が強く愉したのは、彼は自分の家族を救わねばならないということであった。Venus は守護神のことは一言も言わない。そして彼自身も家族を、特に父親を救わんとして館に戻るが (2. 634-6)、今度はその父が逃げるのを拒むと、彼も逃げるのは止め、また戦いに向かおうとする。この時、Aen. にとっては、祖国の守護神よりも自分の父の方が優先されているかの如くに受け取れる。そしてやがて Asc. に異兆が訪れ、喜んで守護神にこそトロイアはあると叫ぶのは、Aen. ではなく、Anch. の方であり、Aen. がその守護神について関心を示し、口に出すのは、その後、彼が Anch. を背負って逃げ出そうとする時一度きりであって (2. 717-20)、しかもその発言は、確かに一行は守護神を携えて出発したということを読者向けに確認或は念押しするためのものとい

う色合が強い。このようにして、夢に現れた Hect. の委托、使命を、直接引き受けるのは、寧ろ父の Anch. の方なのである。更に、何度も言うように、Asc. の予兆を見て、彼等の運命、未来への展望を感得したのも父の Anch. の方なのであった。つまり、Aen. 本人は、直接そのような使命、運命のレベルにかかわって動いているのではない。ただ討死でなければ家族の生命を救うということの方が、逃げる動機として強調されている。父 Anch. は運命なり使命なりを理解感得し、自身で守護神像を抱く。その Anch. を Aen. は救い出す。そしてその未来の運命の担い手となる Asc. の手を引いて Aen. は逃げ出すのである。つまり彼は、少くともこの場面では、彼の家族をそのように媒に置く形で、間接的に、使命或は運命とかかわっているのである。

以上のように見て来ると、先程から私が、使命運命に関する意識或は姿勢の点で、Aen. 一家の内部に一種の分裂、と言うより分離した状態があり、しかしそれが対照的にのみならず補完的な関係において働いて何がしかの意味を生んでいると言って来ていることの趣旨は、少くともこの場面に限っては、ご理解頂けたことと思う。Aen. はここでは、明らかに彼等の使命へと他を統率する或は牽引する側に立ってはいない。彼は家族の存在がなければ、逆にそのまま討死するであろうように話はつくられている。そして彼は、物語の中のその使命に関する側面においては、真の主人公、主役という印象からはどこかが微妙にずれた存在で、どちらかと言えば、寧ろ脇役的、裏方的、或は単なる運び屋的役割を担っているとさえ言ってもよさそうなのである。

問題は勿論、では何故 Verg. はここでそのように複雑な、そして周到な工夫を準備して迄して、我が主人公の Aen. をその使命、運命から遠ざけておくのか、それによって何が狙われているのかということである。Verg. は無論、Aen. 自身が真先に使命運命を理解し、強力に一家を、そしてまた他の落武者たちを引っ張って行くという構造に話を作ることが出来た筈である[14]。何故そうしないのか。それにはいくつかの理由が考えられようが、何よりも大事なのは、恐らくその複雑な工夫によって始めて、主人公 Aen. のトロイアへの祖国愛がその表現の場を得ているということであろう。それが大局的に見て良いか悪いかは別として、彼が再三再四示す祖国にとどまって討死を果すという姿勢は、本来逃げるということ、その使命の遂行に向かうということとは矛盾するものである。その家族を間に置いての、使命、逃げるということとの彼の距離、間接性、屈折がなければ、彼のそのような英雄的姿勢、心情はとても描くことは出来なかったであろうと考えられる。その極めて周到な複雑な構造の工

夫を、態々作者がこらすのは、そのように、逃げる逃げないという互いに矛盾するような事柄を、同時に、或は一時に表現しようとするためにこそのことであったと考えられるのである。Aen. は無論、後にその使命を自覚し、徐々に積極的に動くようになっては行くのであるが、この家族内の分離していながら補完するという関係は、その後も時によって利用され、その度に何ものかがそれによって表わされて行くことになる。

が、以下においては、その物語の進行を追ってではなく、今度は家族の各人が Aen. とのかかわりにおいてその後どのような役割を果たして行くのか、それを人物別に見て行くことにしたい。但し、彼の妻の Creusa は以上の場面において、ほぼその役割を果し終えているので、それは残る3人についてということになる。

6. まず父親の Anch. の場合について見て行きたいのであるが、それ以後も彼の果す役割は、その重要性、また性質の点で今見た第2巻におけるものと殆ど変る所はない。使命と運命に関する Aen. と彼との対照的及び補完的な関係、或は彼を媒とした Aen. とその使命運命との間接的関係、この第2巻に見られた周到な工夫は、その後も物語のかなりの部分に亘って巧みに利用されて行く。

で、その周到な工夫が具体的にどのように働き、殊にそれが主人公 Aen. に関して何を表わすことを可能にしているのかという所を見たい訳なのであるが、それを一々の例に当って吟味検討するというのは煩雑に過ぎようから、整理の意味も兼ねて、また今後の議論の便宜のためにも、ここで全巻に亘る Aen. と Anch. との基本的な役付けの相違、対照ということについて、まずひとわたり、私なりの概観を示しておきたい。

Aeneis という物語には、言わば現実的或は現世的なレベルと、未来的来世的なレベルとの二つの層が、終始重なって並行的に語られて行くという特徴がある。前者は或はごく大雑把には、先程からの私の言葉の使い分けも用いれば、地上の、人間の、そして使命のレベルと、後者は天上の、神々の、運命のレベルと言い換えることも可能である。これはもともと作者の Verg. が、トロイア戦争終結後わずか7、8年間の Aen. のみに関する物語を、ただそれだけを語るのではなく、同時にそれを、未来の落し子たるローマを、またアウグストゥス帝を讃美するために、その意図のもとに書こうとしたという所から来ており、物語はその Aen. の物語の中だけでも、前者の地上的人間的使命のレベ

ルでだけでも、言わば自足するように出来ているが、その全体は、しかし、未来のローマの誕生と隆盛のためという明確な意味付けのもとに支配されてもいる。

このAen.たちトロイアの落武者の一行の祖国の守護神を奉じ、イタリアへ向い云々という行為が、その物語の外で、やがてローマを生み出すことになるという運命を、天上の神々は承知しているが、現実の地上で動いている彼等自身には、原則として、そのような遠い未来への展望は与えられない。

彼等を動かしているのは、まず第一には、祖国を失って新たな安住の地を得なければならないという生活的必要であるが、第二には、祖国の守護神を護持してやがて祖国の再興存続をはかるという使命感がある。

ところがここに、神々が彼等の行先をイタリアのラティウムに限定するということがある。なお且つ、そこで起る戦争に勝利せねばならぬという予言も与えられる。

これは本来的にはAen.たち一行の理解の外にある事柄であって、極論すれば、彼等は祖国の守護神をどこへ奉じて行こうと、彼等の都合次第または自由である筈である。そしてその場所がどこであろうと、彼等が彼等の所期の目的を達したのならば、或は彼等自身がそう考えたとすれば、それで彼等はその自分たちの使命を達したということに、本来はなってもよい筈なのである[15]。が、実際には、神々は場所をイタリアのラティウムと明確に限定し、彼等はそこ迄辿り着かなければ、使命を達したことにならないようになっている。そして彼等がそのようにそこ迄行って、使命を達成して始めて、別のレベルの未来のローマ云々の運命の方も動き始める、或は実現の根拠を得るという仕組みになっている。

つまり、その地上の彼等が神々の言葉通りにイタリアに行くということが、またそこでの戦争を戦うということが、物語の二つのレベルをつなぐ接点になっている、使命と運命とはそこで連続している、ということも言える訳である[16]。

で、彼等にとって、その使命（と認められる方の使命）の遂行に、或は例えば特にイタリアのラティウムに向うということに、積極的になれるかどうか、牽引的な役割を担うかどうかは、その別のレベルに属する知識を持つか持たぬか、その地でのローマの誕生云々という一族の輝ける未来、運命に関して、どれ程の確かな知を得るかというその一点にかかっている。

先程私は、地上に動いている人間には、原則として、そのような遙かな未来

への展望は与えられないと言ったが、例外的に、そのようなレベルに属する知が、断片的にまた部分的に分ち与えられることがある。

その知を得た者は、例えば様々な苦難に遭遇しても、使命の達成へ、イタリアへと、兎も角逡巡するところなく進もうとするであろう。その知に与らぬ者は、例えば何がしかの苦難に会えば、そのことが神の意志、或はその解釈に疑念を抱くきっかけとなる。また行先を迷い始める有力な誘因となる。彼に、特に敬神の心根が足りぬというようなことでもないのであって、例えばある神の予言に従ってある目的地へ向って行くと、そこで嵐に襲われ瀕死の憂目を見る、数々の仲間を失うというようなことがあれば、神の意向は、本当にはどこにあったのか、予言と嵐のそのどちらにあるのか分からなくなる、行先を迷い始めるというのが、むしろその方が地上の人間の通例なのである。

そして無論これは本人の努力その他の問題なのではなく、何か先天的な天恵に属するものなのであって、前者は例えば全く同じ予言予兆に触れてもそこから別のレベルの運命或は未来を感知するが、後者は同じレベルのただそこにある限りのものをしか認識し得ない。

で、これは今更言う迄もないことであるが、その前者は、即ち Anch. であり、後者は即ち Aen. のことを指している。

その例証は既に第2巻において見た通りであって、Asc. に予兆が現れた時、Anch. ただ一人がそこに何か運命の片鱗をでも垣間見、喜んだのであった。そして俄然逃げることに積極的になったのであった。そして Aen. は、その同じ予兆に接してもただ驚き慌てるばかりで、ただ火が燃えている以上のことは何一つ見通すことが出来なかったのである。

が、先程から述べている通り、この運命或は使命の知に関する Anch. と Aen. との対照、差異は、その第2巻に限って認められるものでなく、これは言わば全巻的な規模の通則の如きものなのである。

そして、話を元に戻すと、そのことで最も我々の関心を煽る問題は、Anch. ではなく、何故物語の主人公たる Aen. の方が、その後者の何も知らず何も分らぬ方に回されているのか、その逆転した関係、構造は果して何を目的としたものだったのかということなのであった。第2巻においては、私は先程、それによって、使命云々とは矛盾する性質の Aen. 本人のトロイアへの祖国愛を描く場が生れている、その彼と運命使命との間に距離があるからこそ、始めてそれは可能になっているのだという私なりの観察を挙げておいたのであった。今度は、残りの巻について、その目的或は機能を問う番である。

7.　この周到な工夫は、Aen. 本人が前者の人間的レベルにとどまっていること、神々の未来、運命等の知識に直接与らないということ、そのことを何らかの形で示すものである筈であるというのは、これはむしろ当然のことのようでもあるが、その示し方と言うよりも、そのどのような面を示そうとするかについては区別があり、分類が可能である。で、私としては、便宜上、以下 Anch. と Aen. とのかかわり合いに関していくつかの実例を見るに当って、その言わば消極的な面を示そうとしているものと、積極的な面を示そうとしているものと、その二種に分けて見て行くことにしたい。

まず前者についてであるが、その人間的レベルにとどまっていることの消極的な面を示すというのは、人間であるが故に経験せざるを得ない、使命達成に至るまでの様々の迷い、犠牲、困難、苦しみ等を表そうとするもので、これには Dido 物語（第1、第4巻）、及びシシリー島での船火事の後の Aen. の迷いの場面（第5巻）とを考えることが出来る。

まず Dido 物語についてであるが、これについては既に少し触れているが、改めてここで見ることにしたい。で、これは、Aen. が、それ迄使命遂行への強力な導き手であった Anch. を死によって奪われてしまったこと、その後に大嵐に襲われ辛酸を舐めたこと等が原因で、Aen. と運命、神のレベルとのつながりがなおのこと薄弱になったことから起った事件と解釈することが出来る。

それ以前の Anch. の主導的役割については、しばしば指摘されていることでもあるが、後の考察にも関係する所が大きいので、ここで次手乍ら触れておくとすると、例えば第3巻の冒頭、いよいよ一行がトロイアから船出しようとする場面で、早々と出発の命令を発しているのは Anch. である（3.9）。Aen. はそれに促され、心を残すが如く、涙乍らにトロイアを出発する（3.10-11）。彼は未知の行末に不安を感じはしても、喜びの色は全く見せていない（3.7-8, 11-12）。そして一々の例は略すが、この航海は一行の行先と運命とが断片的にそして部分的にではあるが徐々に明らかにされて行く航海であって、予言の才を与えられ、神々の別レベルの知に与れる Anch. こそがそこで先導の役割を果して行くことに不思議はない[17]。で、Anch. と Aen. の対照的な姿勢を示す、今の冒頭の場面に近似した場面がもう一個所あるので、それに触れておくと、一行は航海の途上、計らずも Buthrotum において、同じくトロイアの生き残りたるヘレヌスとアンドロマケーが新しい彼等のトロイアを建てて住んで

いるのに出会い、思い出を新たにするのであるが、そこから一行が出発しようとする際、順風に少しでも遅れを取ってはならじと、帆を上げよ等々の命令を、これも早々と発しているのは、ここでもAnch.の方である(3.472-3)。ヘレヌスが彼に別れの挨拶を述べるが(474-81)、Anch.の答えは省かれている。で、長々と挨拶を返すのはAen.で、彼は涙乍らに、ヘレヌスたちを既に自分たちの新しいトロイアを建て終えた仕合わせな人々と言い、それに対していつまでも旅の終らぬ自分たちの苦しみを託ち、しかし運命の予言通りにイタリアへ着いたならば、互いに子々孫々まで、心では同じ一つのトロイアを建てようと誓って出発する(492-505)。

Aen.は勿論一行の中心人物なのであるが、精神的には、或は意志意欲の点では、父のAnch.に強力に導かれる形で、イタリアへと、運命或は使命の土地へと向かっているのである。が、彼はまず、この強力な導き手にしてあらゆる苦難の慰め(3.709)でもあった父親を、その目的地を目前にして失ってしまう。

そして更に大嵐に見舞われ、多くの仲間を失い、自身瀕死の目に会う。彼は神の意向が分らなくなり、運命への信頼は、或は以前から確信にもなっていなかったものは、更に薄らぎ始める。Aen.は辛うじて北アフリカリビュアに上陸し、生き残った部下たちには、この苦難もやがて楽しい思い出となる時が来よう、我々の目指すのはラティウムで、そこでは運命が安住の地を約束してくれている、そこ迄行けばトロイアの王国の再興が許されているのだ云々と言って励ますのであるが(1.197-207)、一方、その心の裡は、重苦しい迷いに病み、表情には希望を装うが、深い痛苦の念は胸に秘えていた、と書かれている(208-9)。

このようにして、Aen.の運命からの遠ざかりが二重に準備され確かめられた上で、Didoとの恋愛関係が始まる。Aen.は日々をDidoと過すようになり、カルタゴの建設に従事する等、使命を忘れた行動を取る。

が、それを天上のユピテルが見かねて、メルクリウスを直接遣わし、Aen.を驚愕せしめ、結局彼はそれでカルタゴから出発することになる訳であるが、そこで我々の今の文脈で特に注目すべきAen.自身の発言がある。これは既に概略を紹介済みであるが、Aen.は別れる際に、Didoに次のように言い訳する。

me patris Anchisae, quotiens umentibus umbris
nox operit terras, quotiens astra ignea surgunt,

admonet in somnis et turbida terret imago ;
me puer Ascanius capitisque iniuria cari,
quem regno Hesperiae fraudo et fatalibus aruis.
nunc etiam interpres diuum, Ioue missus ab ipso
(testor utrumque caput), celeris mandata per auras
detulit...

夜が湿った暗闇で大地を蔽う度に、輝く星々が夜空に登る度に、私の夢に父アンキーセースの困ったような俤が現れ、忠告し、私をぎょっとさせるのだ。息子のアスカニウスも、あの可愛い頭の子にしてもそうだ。私はあの子からヘスペリアの王國を、運命があの子に与えた農地を騙し取っているのだ。そして今、神々の使者までが――お許と私の命に誓って嘘は言わぬ――、かの使者までもが、ユピテルご自身の命を、遙々空を駆けて伝えて来た……（4.351-8）

つまり、Aen. は一方では Dido との関係に浸り乍ら、自責の念にも苦しめられていた。最終的な決断のためには、例外的な神の直接の介入を要したが、それ以前からずっと、彼の良心を悩ませ、使命遂行へと彼を向かわせようとし続けていたのは、父の Anch. と息子の Asc. の存在だったのである。

もう一箇所、この関連で見ておかねばならないのは、第5巻の船火事の後の Aen. の迷いとその時の Anch. の役割についてである。

シシリー島で長年月の航海に倦み疲れた一行の女性たちが船団に火を放つ。駆けつけた Aen. はユピテルに祈り、雨で火は消える。が、彼は事件に衝撃を受け、運命を忘れてシシリーに定住しようか、それともあくまでイタリア目指して邁進するか、あれかこれかと迷い始める（5.700-3）。一行の長老格のナウテースが、弱者を置いてイタリアへ向かうべきだと忠言する（704-18）。が、それでもなお Aen. は迷い続け、最後に Anch. が夢に現れて、ユピテルが火を消し止めたこと、Aen. を憐れんで自分を遣わせたことを告げ、ナウテースの言葉通りに行動するように等の助言をして消える（722-40）。Aen. はその通りに行動する。

以上二箇所の例示によっても、私が先程から、第2巻以外でも、使命の遂行ということに関しては Anch. の方が逆に Aen. を牽引する立場に回っていると言っていることがお分り頂けることと思う。運命の知に関して二人は対照的であるが、Aen. と運命との間に Anch. が入り、その Anch. に何かにつけ Aen. が従おうとすることによって、そこに遠い乍らも一本の線が通るというその補完的な構造も第2巻で見た通りのものであった。

で、Aen. はこの構造をそのような所にも用いることによって、一般に言われているように、単に否定的にそれで英雄の弱さを、或は未熟の段階を表現しようとしたとは取らぬ方がよいであろう。その重大な使命を達するためには、彼という人間が、人間であるが故にこそ、どのような苦しみを、迷いを、犠牲を耐えねばならなかったか、また逆に言えば、その使命とは、いかにそのように人々に苦しみを、犠牲を強いた困難なものであったのか、そこのところを読者に強く訴えようと作者はしているのだと、少なくとも私には思われるのである。

註

1) Cf. '... of the 333 speeches in the *Aeneid*, 135 are single utterances which receive no reply in words' —— G. Highet, *The Speeches in Vergil's Aeneid*, Princeton, 1972, 23–4.
2) R. Heinze, *Virgils Epische Technik*, Leipzig, 1915³, 404 ff.
3) Heinze, *op. cit.*, 411 に 'atomistisch' という語が見えるが、それはこのような事態を指したものと理解すべきであると私には思われる。cf. 5) infra.
4) E.g. ' wie er durch seine göttliche Berufung zu hoch über den Menschen steht, um bei ihnen der Einsamkeit entfliehen zu konnen, steht er zu niedrig, um in der Gemeinschaft mit den Göttern zu leben. Er steht zwischen Menschen und Gottern, so ist seine Einsamkeit vollkommen.' —— H. Liebing, *Die Aeneasgestalt bei Vergil*, Diss. Kiel, 1953, 22.
   'For Vergil both Augustus and his prototype Aeneas were more godlike than human; and a god, as we know from Aristotle, cannot have human friends.' —— Highet, *op. cit.*, 43.
5) Cf. 'Das, was Heinze Atomismus nennt, ist nicht Einzelheit und Verlorenheit, sondern Einsamkeit des Überragenden' —— K. Büchner, 'P. Vergilius Maro' in *RE* VIII A_2, 1958, 1341–2. Büchner はその 'Einsamkeit des Überragenden' を 'Das Problem des Führerschaft' と言い換えている。
6) *CQ* 33 (i), 1983, 204–19.
7) 'Mortality, morality and the public life. Aeneas the politician' *Ant. R.* 32, 1972–3, 659–60.
8) art. cit., 218.
9) ここで Aen. の家族と殊更に限定したのには、やや便宜上という所もある。より正確には、他のトロイアの落武者たちを含めて、同じくイタリアへ向かう一行全体と言い直すべきなのかもしれないが、ただ、よく問題にされるリビュアの海岸で Aen. が嵐の後落胆する部下を励ます場面 (1. 196–209) や、第5巻で一行中の女性の群れが船団に火を放ち、結局その地に一部がとどまることになる場面 (5. 604 ff.) においては、一行の者が気力を失い、或は自ら脱落しようとする動きを見せるのに対して、Aen. の方は使命の達成へと彼等を励ます統率者の側に立っている。が、時には例えば一行の長老格の人物が迷う Aen. を励ます場面もある (5. 700–20)。つま

り、一行全体ということになると、Aen. の位置を一貫したものとして把え難い。一方範囲を彼の家族に限定すると、彼等は絶望したり脱落しようとしたりする場面は一切描かれていないから、Aen. の位置は終始一貫したものとして把えることが出来る。それ故、私は特に彼の家族に限って以下論考を進めるが、その場合時によっては一行の中には、例えば Nautes, Achestes, Palinurus 等々、彼の家族と近似の役割を担っている者たちもいたということを含んでおいて頂きたいと思う。

10) 確かに Verg. は作中様々の仕方で Aen. の「孤独」を強調して伝えようとしている節が見受けられる。例えば母神ウェヌス（以下 Venus）がリビュアの森の中、若い狩りの娘に身を変えて Aen. と行き会い、カルタゴ、Dido 等についての様々の助言情報を与えるが、何故か別れる間際までその正体を明さず、何故いつも欺くのか、何故手を握り交して本当の声で（ueras uoces）私たちは話し合えないのか等（1. 405-10）と Aen. に訴えられる場面がある。また亡ぶトロイアの火と闇の中で別れを告げた妻の亡霊を Aen. が三度抱こうとして霊はその度に彼の腕からすり抜けたという場面（2. 790-4, 但しこれは *Il.* 23. 99 ff., *Od.* 11. 206 ff. からの援用、また同じ文句が冥界で彼が父の霊を抱こうとして果せなかったという場面にも用いられている 6. 700-2、また cf. 5. 741-2)、更にまた、Aen. はカルタゴでも最後まで Dido には理解されずに別れたが、冥界で再開した折りにも Aen. の方は涙乍らに頻りに話し掛けるのであるが、Dido の霊の方は無言のまま見向きもせず先夫の許へ去って行くという場面（6. 450-76）等々、例えばこれらの場面は確かに Aen. の「孤独」をそれぞれの仕方で強調して示していると言えよう。

しかし私には以上のような例を仮に数多く作品中から寄せ集めて来ても、それ自体は、例えば Aen. の「孤独」というテーマのもとにまとめるとしても、一個の独立した問題として取り上げるだけの意味は小さいと思われる。もともと Verg. は、「ローマの族をうち立てるにはかくもの難業を要した（tantae molis erat Romanam condere gentem 1. 33）」という有名な一行が象徴しているように、Aen. ならば Aen. の、例えば喜びよりも、むしろその様々の苦難（labores)、自己犠牲、迷い、忍耐、そしてそれらを支えた彼の pietas 等の方を重点的に描くという基本姿勢を持っていた、或はそのように楽或は喜よりも、苦の方面に、またそれを耐え抜く所に英雄の偉業の本体或は偉業たる所以を見ていたと考えられるから、例えばそのように Aen. の「孤独」をそれぞれの場に応じて強調して表現しようとしたとしても、それはそのような苦の方面を強調しようとする作品或は作者の方針通りの一つのテクニックに過ぎない、とそのようなことで十分済ませてよい問題であると少くとも私には思われる。が、cf. E. Burck, 'Das Menschenbild im römischen Epos', *Gymnasium* 65, 1958, 135 Anm. 39, od. *Wege zu Vergil* hrsg. von H. Opperman, Darmstadt, 1976, 253 Anm. 39.

また、その他、例えば家族内のことでも、Aen. とその父親、息子、妻、母親との間におよそ会話らしい会話が交されていないということもしばしば指摘されて来ているが、これも本文の 2 で見たように、作者の技法上の問題として、それを越えた扱いはすべきではないと私には思われる。会話の場面は確かに描かれていないが、別の形で彼の彼等に対する例えば情愛は十分以上に描かれているというのが私の見方で、例えば一旦逃げ了せたのを、姿の見えぬ妻を求めて単身またトロイアの町へ戻り、ありとあらゆる街筋に名を呼ばわり乍ら捜し回る彼の姿や、またその後の亡霊との別れの場面（2. 730-95）等を見て、彼と妻との間の情の絆のうすいのを疑が

う読者は少ないであろう。ただ私が問題としたいのはそのこととは言わば次元が違うのであって、Aen. の一家はそのように確かに例えば情愛の点では十分のつながり、まとまりを持っている。が、にも拘わらず、特に Aen. 本人と他の家族との間には、矢張り「孤立」「孤独」という言葉も使ってみたいような、何か基本的な、作者の構想に基づくと考えられる区別があるように思われる。Feeney はその事態そのものを指してかどうかは分からないが、兎も角彼等の間には free interchange が阻まれているとさえ言ったのである。私は脱感情的な、恐らく多分にメカニックなものであろうそちらの方の「孤独」の問題を究明したいのである。

なお、Aen. の「孤独」全般に関しては、cf. Heinze, *op. cit.*, 403 ff.; Highet, *op. cit.*, passim; G. Lieberg, 'Vergils Aeneis als Dichtung der Einsamkeit', in *Vergiliana, Recherches sur Virgile*, ed. H. Bardon et R. Verdière, Leiden, 1971, 175–91; D. Feeney, art. cit.。殊にこの Feeney 論文の本文及び注に挙げられた豊富な文献が参考になる。

11) Cf. 9) supra.

12) 2. 268–804の私なりの要約。

13) Cf. 1. 227–39.

14) Heinze, *op. cit.*, 29ff. 以来、例えばヘッラニコス描くところのそのような力強く逃げる Aen. 像との比較が問題に取り上げられることが多いが、その私なりの比較は、拙稿「『アエネイス』第2巻におけるアエネアスの「英雄らしさ」について」、『文藝言語研究・文藝編』10、1986、1–22を参照されたい。

15) 無論そこ迄行けば子孫が繁栄し云々ということが、わずかに漠然とではあるが、彼等にも予言されている (cf. 3. 97–8, 158–9)。が、それを信ずるか信じないか、従うか従わぬか、また他の予言の方を取るかどうか等については、彼等自身の選択にまかせられている訳である。

16) 他に、厳密には、トロイアの守護神と Asc. という二つの要素がその二つのレベル、また使命と運命とをつないでいる訳なのであるが、便宜上、今はそれらについての言及は省いた。守護神については、現世的レベルではそれはトロイアの守護神であり、未来的にはそれはやがてローマの守護神となる。また Asc. は、現世的には Aen. 一家の一粒種であるにとどまるが、未来から見れば彼は皇帝ユリウス家の始祖、その意味でのローマの運命の起点である。兎も角この両者は、同じものが二つのレベルでその様相或は意味を変じるのであるが、同じものであるが故に両レベルをつなぐ接点をなす。が、そのいずれもが、未来的レベルを度外視しても、十分彼等自身にとって意味を持っており、神々が何故か指定する彼等の行先程には、彼等にとって不可解さがない。

17) Anch. は、例えばトラキアで出会った凶兆についてまず第一に報告を受け意見が求められている (3. 57–9)。デロス島でのアポロの神託を解釈するのも彼である (102 ff.)。クレタ島では夢に現れた守護神たちの言葉を Aen. は Anch. に伝え Anch. が以前の解釈の間違いを認めつつ出発を決める (177 ff.)。ストロパデス群島でケラエノーの不吉な予言に皆が驚愕し落胆する一方で、神々にその予言の当らぬことを祈り出発を命じるのも彼である (259–67)。また始めてイタリアが見えた時、彼は神々に祈りを捧げ (525–9)、白馬の予兆を読み解く (539–43)。更に彼は一行がシシリー島に近づいた時、スキュッラ・カリュブディスの危険を真先に警告する (558 ff.)。そしてオデュッセウス一行がアイトナ山麓に置き去りにしたアカエメニデースに一行を代表して相手になるのも彼である (610–1)。